

【前半2から】

### 《コーディネーター M》

(しみじみと) 仲間の存在というのは本当に大きいです。2003年に「部落の心を伝えたいシリーズ」(NO5)『峠を越えて』という啓発ビデオができたんですけど、その時に、Nと、Tと、H、3人が語る場面があるんです。そのやり取りに癒されます。

私がK中学校でお世話になった時に、3人に語ってもらう時があるんです。そのやり取りが、本当にいいなあと思うし、凄いなと思うし、Hにこれを読んでどう思ったんだということを語ってほしいと思うんですが、やっぱり、そういう絆を全ての学校で、全ての学年でつくってほしいと思うんですね。

(力を込めて) この言葉はグツときます。「この子に恥ずかしくない生き方を、私はこれからしていきたいと思っています。」これは、今年一緒に仕事をしているG先生が、Y中学校の3年の子に語った言葉です。

その言葉を聞いたら、他の若い2人の担任は、ぐっと胸に響きます。心に染みます。このC先生の語りが、若い教師の本気の語りを引き出していきます。本気の語りは、見事に本気の語りを引き出していくんです。

C先生から、まずマイクを受け取った35歳の教員の語りです。結婚の時、結婚相手が部落出身ということで、家族(祖母)が反対することで悩んでいる友人に「そんな関係ないでえ」の一言で済ました自分について語った言葉です。多分、ずっと自分の中で抱え込んできた言葉です。紹介する発言は、多分他人に初めて語った言葉です。

### 【2025年7月18日 思いを語った生徒へのメッセージ(Y中学校3年1組担任 35歳の語り)】

本当にみんなの意見を聞いて心を動かされました。なんだろう、ここで自分のことを語ってすごく勇気がいると思うんだけど、人生って多分後悔の連続だと思います。いろんな話の中で、こうしておけばとか出てくると思うんですが、ただ、やっぱり先生としてみんなには、人生のターニングポイントで、後悔してほしくないです。ターニングポイント、まあ、分岐点ですね。

一つ人権学習を通して後悔していることが一つあって。先生は結婚したんですが、友だちが結婚する時に、実は(結婚相手が)部落出身で、ばあちゃんに結婚したらあかんとか反対されたと、先生はその友だちから相談を受けたんです。その時に、先生は「そんな、関係ないで」っていうふうに、その一言で、「全てをいけるよ。大丈夫だよ」って言ったつもりだったんですが、その「そんな関係ないで」っていう言葉を、その時ごっつい後悔してて。

その「関係ない」っていう言葉が、ごっつい他人事やなっていうのを後でわかって、何でそんなことをしたんだろうって考えたら、やっぱり自分の人権学習の浅はかな考えが元やなって。

やっぱりみんなには、そういったところで後悔してほしくない。その時にやっぱりここで学んだことを、自分のこと、他の友だちのことでもいいんですが、なんていうか、間違っていることは間違っているって、そういう人たちに「ひとごと」じゃなくって、寄り添える人間になって欲しいかなと思います。

皆さん、教師の言葉というのは本当に大きいです。子どもたちにすごい力を与えていきます。こういう語りを聞いたら、先生のことが大好きになります。この場にいる喜び。この語りを受けた喜びを噛みしめます。そうすると、27歳の教師が、言わなくてもいいことです。自分をイキイキと若々しくさらけ出しました。語ることが喜びになります。その語りです。

### 【2025年7月18日 思いを語った生徒へのメッセージ(Y中学校3年2組担任 27歳の語り)】

皆さん正直な思いをたくさん語ってくれたので、僕も3学年をもって(1年から3年まで持ち上がって)、どのタイミングで話そうかなと思って話してなかったことを話そうと思います。それは、なぜ僕がポジティブかというこの根本にあることなんですけど、僕が2歳の時、僕の親は離婚しています。母親がいません。今は会いますが…。

僕は言い訳をし続ける人間でした。人と比べる人間でした。だってお母さんおらんもの。しかも、父親に関しては中学くらいまで単身赴任でずっと愛媛にいたから。

この単身赴任の時に、僕が1人でバスに乗って、愛媛に行ったっていうエピソードを話したと思うんですけど、行ったっていうのはそういうところにあります。

それで、自分に言い訳し続けてきたのが変わったのがやっぱり部活なんですね。顧問の先生に努力を認められた時、凄い

自分の自信にもつながったし、父親にも、僕は何かミスをした時にすぐ「ごめん」って言うけど、「お前ごめんって言うな。せめて『すまん』とかにせえ」って言われて、何を言っているのかわからなかったけど、「わかった、『すまん』って言うわ。ああ、『すまん！』」って言うようになったら、やや気持ちに強気な感じはちょっと出るよね。

それで、M先生が「言霊」って言ってくれと思うんですが、本当に自分の言葉っていうのは、力を絶対持っているはずなんです。さっき語った内容もちろんそうなんですが…。

僕にも、教員になったのには当然夢があります。それは、君たちの人生に影響を与える先生になるってことです。

皆さん、本当に良い学校に帰って来れたと思える何とも嬉しい言葉です。

「君たちの人生に影響を与える先生になる」

皆さん、生徒の前で言えますか？ かつこいいなあと思います。27歳です。

そして、自分自身をさらけ出しています。

「僕は言い訳をし続ける人間でした。人と比べる人間でした。だってお母さんおらんもの。しかも、父親に関しては中学くらいまで単身赴任でずっと愛媛にいたから。」

これは誰にも言う必要のない言葉です。でも、語った瞬間、自分の世界が変わります。2学期は「スダチの苗木」の研究授業をします。語り合いをします。みんなワクワクです。やっぱり、人権学習の醍醐味は語り合いにあります。そんな思いを経験してきたH君です。皆さん、拍手してください。(拍手)

## 《パネリスト H》

### 1 はじめに:全体学習との出会いと本日のテーマ

Hと申します。本日は、私自身が中学時代の「全体学習」で変わった経験と、そこで学んだこと。次に、教員として母校・I中学校などで実践した全体学習から得られたもの。そして現在、県教育委員会人権教育課の立場で人権学習を改めて見つめ直し、若い先生方に伝えていきたいこと。これらを総括し、自身を振り返る意味も込めて、お話しさせていただきます。

### 2 「全体学習」が自分を変えた中学時代

今の自分があるのは、I中学校時代の全体学習のおかげです。

当時、隣に座っているN君は、小学校時代から知る、何でもできるスーパースターでした。小学校では陸上で全国3位になる実力の持ち主でした。私が陸上を始めたきっかけも、彼に「やろう」と誘われ、流されるままに始めたことでした。同じ走り幅跳びをしていますが、小学6年生で彼は5m30cm～40cm、私は頑張っても4m20cmほどで、同級生なのに1m以上も差がありました。

中学入学時、「Nの後ろについていだけでいいのか」と葛藤し、野球部に入って、違うことに挑戦しようかと思っていました。しかし、彼に「陸上を一緒にやろう」と言われ、陸上を続けることにしたものの、実力差は大きく、当時の厳しい練習にもついていけず、1年生の夏頃までは幽霊部員のような状態でした。

そんな中、学年全体で行う全体学習を通して、自分自身を見つめ、向き合うようになりました。M先生のクラスではありませんでしたが、1年生の終わり頃、自分の学級が真ん中で授業を行う番が来て、そこで初めて人権について深く考えました。学級や学年全体での語り合いを通して、自分の生活を見つめ直し、「今の自分はどうか」と真剣に考えるようになると、生活が変わっていききました。

まずは、陸上面で変化が現れ、その冬からは陸上の練習を一度も休んだ記憶がありません。「Nは確かに凄い。でも、他人と比べるのではなく、自分は自分。自分のペースで、今、自分にできることを精一杯やろう。自分自身が変わらなければ」と思うようになったのです。

当時の生徒は「キラキラ輝いて生きていくために」という大きなテーマで話し合いをしていたように思います。これは、今も子どもたちに伝えていることですが、「違いを認め合い、支え合い、共に伸びて、それぞれが輝く人生を送る」ということにもつながっています。この経験のおかげで、陸上を頑張れるようになり、記録という結果がついて自信が生まれ、勉強にも意欲的に取

り組めるようになってきました。そして将来、自分も先生になり、子どもたちと「共に伸びていく関係」をつくりたいと考え、教員になり、その後は、小中学校で発達段階に応じた人権学習を実践してきました。

### 3 人権学習の本質は「自問自闘」と「仲間づくり」

私は、これまでに小学校高学年や中学生を受け持つことが多かったのですが、子どもたちに「人権学習は何のためにするのか」を常に問いかけてきました。小学校高学年になると、「差別はいけない」「いじめはいけない」ということは、子どもたちも知識としては理解しています。しかし、現実には差別はなくなりません。「被差別の立場に立つての共感的理解」や「差別をしない させない 許さない」と教えるなどの知識的理解はとても大事ですが、それだけで終わってしまい、自分たちの生活を振り返らなければ、本質には迫れません。

「なぜ差別があるのか」を子どもたちと一緒に深く考え、自分の心の中に「自分以下を求める心」や「自分より下がいて安心する心」「異質なものを排除しようとする気持ち」と向き合っていくことが大切になってきます。自分の心の中にある差別につながるような意識としっかり向き合い、なぜそうしてしまうのかを考え、自分の心と対話していくのです。

私は、M先生に教わった「自問自闘」という言葉を、子どもたちにも問いかけてきました。自分自身に今の自分について問いかけ、自分自身の心と向き合い、闘いながら、よりよい自分の生き方を探し求めてきました。人権学習は、まさに自分自身の生き方を語る学習であり、キラキラ輝くための学習です。

しかし、それは一人だけでは、行き詰まったり、気持ちが折れてしまったりするため、難しいものです。だからこそ、人権学習では、「仲間づくり」が大変重要になってきます。支えてくれる仲間がいるからこそ頑張れる。当時のI中学校の全体学習には、まさに「支え合い高め合える仲間」がいました。Nが喋るからTが続き、また誰かがつながる。そんな仲間がいたから頑張れたのです。

人には得意なことも苦手なこともあります。違いを認め合い、補い合い、支え合いながら共に伸びていく集団になりました。また、「おかしいことや差別は絶対に許さない」という強い気持ちで連帯でき、悩んだ時には支え合える仲間になりました。そして、高校や社会など、違う場所に行っても、あの時の仲間がいるからこそ、どの場でも堂々と自分を語っていける。私は、そんな集団をつくりたいと願い、教員としてその思いを子どもたちに伝え続けてきました。

### 4 本音の語り合いを支える教師の姿勢と信頼関係

今、現場の先生方から「本音の語り合いの授業はどうすればいいのか」と質問されることがあります。M先生も言われるように、まずは教師自身が自分を語らなければ、子どもたちは本気になりません。

私自身も、中学生時代も今も、心の葛藤があります。何歳になっても「自問自闘」しています。自分と向き合う姿を子どもたちにさらけ出し、共に輝く人生をめざすことが大事です。そして、その土台となるのが「信頼関係」です。

現在、県教育委員会人権教育課の指導主事という立場になって思うことがあります。人権教育は「学校の教育活動全体を通じて行う」と明記されていますが、実際には「この時間に人権学習をします」という時間が明確に位置づけられていない現状があります。だからこそ、先生方は、道徳、総合、学活など様々な時間を使って、教育課程の中に組み込んでくださっています。

同時に、教育課程には載らない「隠れたカリキュラム」の部分、つまり日常の学級経営がしっかりできていないと、本音を語り合う授業は難しいと感じます。先生と子ども、子ども同士の信頼関係ができていない状態で、授業の時だけ「頑張ろう!」と言っても、上滑りになってしまいます。普段の生活の中で、譲り合ったり、支え合ったり、「ありがとう」と感謝を伝え合ったりする機会をつくり、あたたかい雰囲気の学級づくりをしていくことが、大前提なのだと思います。

例えば、私は体育科の授業をうまく使い、学級経営をしていました。準備運動では、鬼ごっこやペア活動をしたり、ジャンケンとゲームをうまく取り入れて誰とでも関わったりできるようにしていました。また、ルールを工夫して誰もが輝けるチャンスをつくったり、勝ったり負けたりする中で色々な人の気持ちを考えられるようにしていました。そして、結果で評価するのではなく過程を大事にして、その子なりの頑張りを学級全体で認め合っていくようにしていました。

そのような土台となる学級経営がきちんとできてこそ、人権学習が意味のある豊かなものになります。そして、誰か一人

だけが活躍するのではなく、集団の中で先生が語り、子どもたち一人一人がそれぞれの思いを返すことが大切です。そのような本音を語る授業を通して、子どもも教師も、みんなが一緒に輝いていける。そうした授業づくりをしていけたらと、先生方にはお話ししています。

## 5 おわりに：人権教育への恩返しとして

ただ、『語り合いの授業』というと、「喋らなければいけない」と感じる人もいるかもしれません。私自身、マイクを持ってドキドキしながらも「乗り越えた」という達成感は確かにありました。しかし、人には性格や特性があります。発表しようとしても、なかなか大勢の前で発表するのが難しい子どももいます。だからこそ、大切にしてほしいのは、必ずしも喋ることではなく、その場において、みんなと一緒に自分自身の心と対話することです。

先生方も、子どもに指示するだけでなく、まず自分自身が自分の心と向き合い対話し、生き方を見つめ直し、子どもたちと共に人権の授業をつくり上げていってほしいと思います。特に小・中学時代にそうした経験を積み、高校でも同様の授業が受けられるようになることを願いながら、今、職務に励んでいます。

これまで私が全体学習や教員生活で学んだことを、これからは先生方に伝えていくことが、人権学習に育ててもらった私なりの恩返しだと感じています。先ほどのN君の話にもありましたが、子どもたちがしんどい思いをしないよう、教育を通じて働きかけていく必要性を改めて感じています。ここに集まった皆さんと共に、人権が尊重される社会をめざして頑張りたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

## 《コーディネーター M》

それでは、10分間の休憩を取らせてもらいます。その前に紹介をさせていただきますが、「T-over人権教育研究所・人権子ども塾」の子どもたちの取り組みをまとめたラミネート加工した写真です。パネルとしてつくっているんですが、パネルは現在、大分県国東市に貸し出しています。

この「T-over人権研究所・人権子ども塾」の取組は、ホームページで詳しく紹介されています。

このホームページで私たちが終始訴えてきたことは、語り合いです。安心してものが言える空間をつくることです。言いたくなる。聞いてもらえる。まさに「信頼」と「尊敬」です。そういう関係の中で教師もイキイキしていきます。そういう取り組みがずっと積み上げられてきた人権子ども塾の営みです。一泊研修の話もありましたが、こんなことができるんだというようなことが、隣に居るY先生によりできてきました。

多くの人のご支援をいただいて取り組みがあるわけですけど、今日、カンパの箱も置いていますけど、よろしければ、カンパをいただければと思います。いろんな取り組みがあります。（隣のYさんに、にこにこしながら）来年の一泊研修はどこに行くんですか？（会場に温かい空気があふれる中で）まあ考えていくということで、今日も、様々な活動を楽しみにしている人権子ども塾の子どもたちが参加してくれています。この子らの力が学校を変えていくし、地域を変えていきます。

「人権を語り合う中学生交流集会」は30年目という節目でなくなりましたが、この「人権子ども塾」の取り組みをしっかりと積み上げていきたいと思っています。それでは、10分間の休憩に入りたいと思います。

思いの丈を語っていただいたパネリストの皆さんに拍手をお願いします。（拍手）

【後半1へ続く】